



Data	
監督:	ウォン・ジョン (黄進)
出演:	ショーン・ユウ (余文樂) / エリック・ツァン (曾志偉) / エレイン・ジン (金燕玲) / シャーメイン・フォン (方 皓汶) / アイバン・チャン (陳 學文) / シュエイ・ジエ (稅潔) / ブライアン・マック (麥子 樂) / ピーター・チャン (陳 彼得) / アン・シウヒン (吳肇 軒)

## 👁️👁️ みどころ

アーネスト・ヘミングウェイの小説と映画『誰がために鐘はなる』と、芥川賞作家・柴田翔の『されどわれらが日々』を合わせたような邦題『誰がための日々』とは一体ナニ？ 原題の『一念無明』とは一体ナニ？

香港金像獎で多数の賞を受賞した、注目の若手監督、黄進（ウォン・ジョン）監督の長編デビュー作は、「家族の支えが必要です」のセリフから始まる切なさいっぱいの父子のドラマだ。

香港特有の「劏房（トンフォン）」に住む躁鬱症の息子と、過去の反省の上に息子を支えようとする父親との物語は必見！ 香港映画は『インファナル・アフェア』シリーズの面白さだけではない！ そんな体験を本作で。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ 「家族の支えが必要です」。そこから物語が！ ■□■

去る2月19日、タレントの堀ちえみが“舌ガン”であることを自らのブログで公表したことがマスコミに報道され大反響を呼んだ。彼女は最近では珍しく7人の子持ち（2回の離婚、3回の結婚）だが、ブログによれば、手術をしガンと闘う決意をしたのは「家族のため」らしい。それを聞いた子供たちは、母親を支えていく決意を表明している。

このように、重篤な病と闘い、それを克服していくためには“家族の支え”が何より大切だが、本作が長編デビュー作となり“アジアで最も次回作が注目される監督の1人”となった香港の若手監督ウォン・ジョン（黄進）は、物語をそこからスタートさせていく。医師から「家族の支えが必要です」との言葉を聞かされ戸惑い気味なのは、躁鬱病で入院していた長男ウォン・サイトン（ショーン・ユウ 余文樂）の退院後、一緒に生活せざる

を得ない父親ウォン・ダイホイ（エリック・ツァン 曾志偉）。この父子の対話がごちないのは、トンの病気のせいばかりではなさそうだが、それはストーリーの進行につれて、少しずつ明かされていくだろう。

トンを演じるショーン・ユー（余文樂）は『インファナル・アフェア』シリーズ（『シネマ5』336頁）でトニー・レオンの若き日を演じたイケメン俳優だが、本作では無口でかなりうっとうしそうな男。強制入院（措置入院）させられた理由も後に明かされるが、入院から1年を過ぎて今の病状は薬で安定しているらしい。しかし、医師は「薬は欠かさないように」と念を押していただけでなく、「病院のベッド数の都合もあり・・・」と言っているから、病院を離れてしまってトンの病気はホントに大丈夫・・・？

退院後のトンの病状に注目するとともに、わずか3000万円の製作費ながら2017年香港金像獎で最優秀助演男優賞、最優秀助演女優賞、最優秀新人監督賞を受賞する等、数々の受賞に輝いた本作導入部の味わい深さにも注目！

## ■香港にはこんな住宅が！その狭さ、劣悪さにビックリ！■

1日違いで観たイタリア映画『ナポリの隣人』（17年）でも、エレベーターのないアパートの階段を毎日上り下りしている主人公の姿が印象的だったが、彼は名を成した老弁護士だから、部屋は豪華そのものだった。しかし、本作でホイがトンを連れて階段を上ったどり着いたのは、劏房（トンフォン）と呼ばれる香港特有の共同（？）住宅だ。

団塊世代の私たちが地方から都会の大学に入学した場合、多くの若者は下宿したが、その大半は、風呂なし、便所、洗い場は共同のアパートで、部屋の広さは4畳半～6畳だった。それに対して、香港の劏房はひとつのフロアを板でいくつかの部屋に区切って各部屋毎に貸し出すもので、3畳ほどの部屋には2段ベッドが置かれている。ホイは「住めば都。窓があって眺めがいい。テーブルをどかせば広くなって、（その広さは自分の足で）2歩だ」と語っていたが、都市問題、住宅問題をライフワークにしている私は、香港にこんな狭くて劣悪な住宅があることにビックリ！

こんなところに住めば、トンの躁鬱病はますます悪化してしまうのでは・・・？その上、隣の部屋は母親と息子の2人住まいだが、息子に「勉強！勉強！」と迫る声がかましそう。もっとも、その息子がいつも逃げ出して、ひそかに自分の世界を作っている屋上に乗ると、そこは解放感いっぱい別天地のようだが・・・。

## ■なぜ父親ホンが息子トンの世話を？トンの躁鬱症は？■

父親ホイ役のエリック・ツァン（曾志偉）は、本来ヤクザ役がピッタリの名優（？）だが、本作ではそんな表の顔（？）とは正反対の善良な父親役を、味わい深く見事に演じている。もっとも、スクリーン上では冒頭からずっと彼はトンに対して優しく接しているが、これはトンによる“ある事故”でトンの母親ロイ・ユンヨン（エレイン・ジン 金燕玲）、

つまりホイの妻を失った後かららしい。介護に絡んだある事故によるロイの死亡について、トンには裁判にかけられたものの、結局無罪になったから良かったが、トンには裁判からの命令によって躁鬱病で措置入院させられることに。そのため、ずっと大陸と香港を結ぶ長距離トラックの運転手として働き、稼いだ金は妻に渡すだけで全く家庭を省みなかったホイも、今はやむなく（その反省の上に？）、トンの面倒を見ているわけだ。

退院後、住むところがないため父親と同居することになったトンは、「俺は大丈夫だ」「俺が働くから」と言っていたが、どうも薬はごまかして飲んでいないらしい。毎日、就職先を求めてかける電話でもいい返事はないし、面接までこぎつけてもトンの躁鬱病らしき様子が浮かび上がると即アウト！そんな中、「俺の病気はもう治った」と信じているトンはある日、招待されてもない友人の結婚式にノコノコ出掛けて行ったから、新郎新婦はもちろん、招待客からは胡散臭そうな目で見られることに。更に、あろうことか挨拶している舞台上の新郎のマイクを奪って、「今日は結婚パーティの席なのに、みんなはカネの話ばかりだ。カネのことばかりではなく彼らを尊重しろ」とまくしたてたから、会場は凍り付いてしまうことに。こんなトンの姿をみていると、トンはやっぱり躁鬱病そのものだ。

## ■□■介護は誰が？カネだけ？他人まかせ？■□■

東野圭吾の原作を堤幸彦監督が篠原涼子主演で映画化した『人魚の眠る家』（18年）は、人魚のように眠っている可愛い女の子の脳死移植を巡るシリアスな問題作だったが、同作における“介護”はかなり特殊なものだった（『シネマ43』掲載予定）。しかし、本作の回想シーンで繰り返しスクリーン上に登場する、長男トンによる母親ロイの介護を巡る問題は、少子高齢化が急速に進む日本でも緊急の課題になっているテーマだ。そこでは、介護は在宅で？それとも施設で？という問題の他、介護は誰が？つまり、家族がやるの？それとも専門スタッフ（他人）にまかせるの？という問題がある。ちなみに、長男のトンには弟チェンがいたが、チェンはアメリカで幸せな結婚をして裕福な暮らしをしており、カネだけは送ってくるものの、母親の介護には全く無関心だった。

トンの母親への誠実な介護ぶりと対照的に、弟ばかりを愛し、トンにつらく当たるロイのイライラぶりを見ていると、ロイの介護は専門スタッフ（他人）に委ねた方がいいのではと思ってしまうが、トンはどうしても母親を施設に入れたくなかったらしい。そのため、婚約者のジェニー・タム（シャーメイン・フォン 方皓玟）とも別れ、会社も辞めて、1人で母親の介護に取り組んでいたが、その苦しさは想像以上だった。そのため、いつしかトンは躁鬱病に陥った挙句、母親の死というとんでもない事故を起こしてしまったわけだ。

ウォン・ジョン（黄進）監督は若手なのに、なぜこんな問題をここまでシリアスに追及し、スクリーン上に描き出すの？そこには、大陸との対立の中“一国二制度”の建前さえ脅かされている今の香港問題もありそうだが・・・。

## ■□■これでもか！これでもか！切なさで胸が一杯に！■□■

「ディレクターズ・ノート」でウォン・ジョン監督は、「この映画はとにかく香港の人々に見てほしい作品です。」「私たちはこの作品に登場する父と子であり、またその周囲の人々でもあります。」と述べている。また、脚本家のフローレンス・チャン（陳楚珩）は「メッセージ」として、「この物語は、主役が一夜のうちに世界を救うヒーローになり、そして皆が幸せで楽しい生活を送って生きていく、という話ではありません。」と述べている。

まさにその通りで、割房での共同生活が始まった父子がスクリーン上で展開していくのは、近時のハリウッドの痛快なヒーローものとは正反対の苦しく切ないもので、胸が一杯になってくる物語ばかりだ。躁鬱病がどんな病状なのかは弁護士の私ですらよくわからないが、スクリーン上でのトンの行動を観ていると、その不可解さにビックリ。そのハイライトの1つは、恋人ジェニーとの再会シーンだ。レストランで彼女の好きな料理をテーブル一杯に並べて待っていたトンは、ジェニーが現れるとうれしそうだったが、そこでジェニーが語る話は現実的なものばかり。また、トンを教会に連れて行ったジェニーは、みんなの前でトンを紹介し、母親の介護を契機とした2人の別れ、それに対する彼女の戸惑いと怒りを切々と語ったうえで、いかにもキリスト教信者らしく、「でも、私はそれを赦す」と締めくくったが、さあ、そこでのトンの反応は？また、人間はどんな精神状態になればこんな異常行動をとることになるのかと思いきらされるのは、その後スーパーに入ったトンが狂ったようにチョコレートをつかみ、それを次々と口の中に入れていく姿だ。彼は一体なぜそんな行動を？これが糖分補給のためでないことは明らかだから、その異常な行動が目立つのは仕方ない。すると、SNSが発達している昨今では、たちまちトンの周りに人が集まり、次々とスマホのシャッターが押され、トンの姿は直ちにインターネット上で拡散していった。すると、割房で共同生活をしている人たちが、ネット上でそんなトンの姿を見ると、彼らの反応は？

## ■□■「一念無明」(原題)とは？難解なその意味をしっかりと■□■

アーネスト・ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』は、小説も映画もメチャ面白かった。他方、私が大学に入学した当時は、芥川賞作家、柴田翔の『されどわれらが日々』が、学生運動をする学生たちの必読（文学）作品だった。しかして、その両者を合わせたような本作の邦題『誰がための日々』とは一体ナニ？そんな、わかったようなわからないような邦題に対して、本作の英題は『Mad World』、そして原題は『一念無明』だ。『Mad World』はすぐに意味がわかるし、本作を観ていると、なるほど、とその英題に納得できる。しかし、『一念無明』とは一体ナニ？

パンフレットにある解説では、それは『大乘起信論』の注釈書の中にある、中国仏教では有名な一節「一念無名生三細、境界為縁長六粗（一たび無明を念ずれば三細生じ、境界

は縁と為りて六粗を長ず」から取られており、真理に暗いと余計な煩惱に悩まされる、というような意味である。」と書かれている。そう聞くと、なるほどと思わないでもないが、実はそれでもよくわからない。しかし、続く「本来、人は希望の中で歩み、生きているはずである。辛い日々を過ごしていると思った時、少し考え方を変え見る方向が違えば、もっと違うものが目に入り、もっと違う人生に気づくかもしれない。それは自分だけでなく、周囲の人々を見る時も同様なのだ。」との解説を読むと、なるほどなるほど・・・。

製作費3000万円の本作が、地元香港での公開時に220万USドル（日本円で2億5千万円）という大ヒットを記録した理由について、解説には「自分たちの身近な話題に目を向け、今いる居場所からどう生きていくのかを提示したからかもしれない。」と書かれているが、そのことを含めて、本作の原題の意味をしっかりと考えたい。

## ■□■これから父子は何処へ？その絆は？希望は？■□■

前述の「ディレクターズ・ノート」でウォン・ジョン監督は、さらに、「板で仕切られた部屋の隣人たちも、同じく抑圧された人々です。それなのに団結して立ち上がる訳でもなく、自然と自分より弱い者を抑圧していきます。皆、悪人ではありません。しかし自分では意識しないままに、ある時はその弱さから、ある時は無知から、私たちはしばしば暴力的な傾向に走ってしまいます。これは至って普通にある悪で、私たちの社会を反映しているものです。」と語っている。しかして、スクリーン上には“チョコレート騒動”をインターネット上で見た割房の住人たちが、ホイとトンに立ち退きを求める風景が登場するので、それに注目！これは、割房の住人たちが集まってひそひそ話しをしている中にホイが割り込んでいったために生まれた風景だが、そこでは、多分あなたでも私でもそうするであろうという風景になる。もちろん、住人たちの意見や決議には何の拘束力もないから、ホンが自分たちの権利（実害のなさ）を主張し、あくまで居住する権利を主張することは可能だが、普通はそこまでできないものだ。そんな私の予想通り、割房の住人の意見を聞いたホンは、「わかった、出ていくよ」と答えたが、さあ、これからこの父子は何処へ？

中盤からラストにかけてのホイとトンの父子には明るい物語は全くなく、暗く切ない出来事ばかりが続いていく。隣人の母親が、「子供がいらない！」とわめきながら屋上に上がると、たまたまそこにはトンと子供が屋上のへりに立っていた。そこで、母親やホイが「早まるな！」と声をかけたのは大きな誤解だったが、そんな誤解が生まれるほど割房内の人と人との信頼関係は崩壊していたことになる。そんなギリギリの局面の中、ホイとトンの父子の絆は？希望は？それがゼロになってしまうとやはりダメ。さあ、ウォン・ジョン監督はそのギリギリの絆や希望を本作ラストでどう描き出すのだろうか。それはあなた自身の目でしっかり確認し、せめてホッとした気分でそれぞれの座席を立ち上がってもらいたい。

2019（平成31）年2月25日記